大学生の性役割観・性役割的性格特性とファッション意識の関連について

吉岡　映理*・桂田恵美子**

抄録：本研究の目的は大学生を対象として，伝統的な性役割観や性役割的性格特性を強く持つ，またそういった事柄を強く支持する人ほど，ファッションに対しても積極的な意識を持つ傾向があるということを検証することであった。ファッション雑誌が伝統的な性役割観を促進しているという見解があるため，性役割観や性役割的性格特性とファッション情報入手方法としてファッション雑誌を用いることやファッション意識の間には関連があると予測した。ファッション雑誌など，どのような媒体を使ってファッションの情報を入手しているかということを問う項目や，性役割観について問う平等主義的性役割態度スケール，性役割的性格特性について問う性役割特性尺度，ファッション意識について問うファッション意識尺度を用いた，質問紙調査を行った。調査対象となったのは大学生 251 名（男性 60 名，女性 191 名）であった。結果，性役割観については，女性に限り，個人的側面得点にのみファッション情報入手方法やファッション意識得点との関連があり，ファッション情報入手方法としてファッション雑誌を選択した者，およびファッション意識が高い者の方がプライベート，とりわけ結婚後の生活における男性，女性の役割について伝統的な考え方を持っていることが示された。性役割的性格特性については，女性のみファッション情報入手方法としてファッション雑誌を選択した者の方が女性性得点が高く，また男性では男性性得点が，女性では男性性得点および女性性得点が高いとファッション意識が高いことが分かった。よって，仮説は女性の場合は概ね支持されたと言えるが，男性の場合は一部のみしか支持されなかった。

キーワード：ジェンダー，性役割観，性役割的性格特性，ファッション

問題と目的

近年では日本人の様々な価値観の変化が起こっており，そのひとつに性役割観があげられる。鈴木（1991）は，性役割観を男女にそれぞれふさわしいと見なされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規範およびそれらに基づく行動を意味するものとして定義としている。つまり，性役割観とは性役割に関する社会的規範に対して個人がどのように考えるか，また，どのように行動するかということを表わすものであると言える。

性役割に関する社会的規範とは，職業を持つのは男性，家事・育児をするのは女性というように，従来，社会において男性，または女性にふさわしいとされている性役割のことであり，伝統的性役割とも言われる。しかし，現代ではその伝統的性役割に対する人々の価値観に変化が起こっているとされている。例えば湯浅（2001）は，家庭のことは全て女性で男性は父親として満足な役割を果たさないという家族のあり方に，近年の若者が意義を見出せないことによって結婚しなくなり，晩婚化が進むと述べている。現在の晩婚化や非婚化も伝統的な性役割の変化を反映しているのかもしれない。

性役割観の変化は，1986 年に男女雇用機会均等法が施行されてから女性の社会進出が急激に進んだことによって顕著になったと考えられる。労働政策研究・研修機構のデータによると 1980 年から 2015 年までの間で男性雇用者と専業主婦からなる世帯が減少し，共働き世帯が増加している。そして 2015 年の段階では，その数が逆転し，共働き世帯の方が多いという結果になっている。よって，結婚していても夫と共に社会に出て働いている女性が現代では当たり前のようにいると言える。こうした社会的な変化が人々の性役割観の変化に繋がっていると考えられる。

また，性役割観以外に，個人の性格特性の中にも性役割が存在する。湯川・清水・廣岡（2008）はジェンダー特性という語を用いて「活動性と治世における有能さ」，あるいは「作動性・道具性」は男性的特性を表わし，「美と従順」あるいは「共同性・表出性」は女性的特性を表わす語として示している。つまり，性役割に基づいた男性的な性格特性と女性的な性格特性が存在するということである。このような性格特性を本研究では性役割

*関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程
**関西学院大学文学部教授

的性格特性と呼ぶ。

性役割観が現代になって変化しているのと同じように，性役割的性格特性も変化していることが考えられる。湯川ら（2008）は，ジェンダーに関連するとされている単語（活発な，あたまのよい，美しい，おしゃれな等）を，大学生を対象に男性的か女性的かを識別させる課題を 1970 年代と 1990 年代に行い，両年代間の結果の比較を行った。結果として，1990 年代の方が各単語が男性的・女性的と区分されにくくなったことを示している。また，児玉・杉本・松田（2002）は現代の大学生が持つ性格特性について調べ，男性性女性性ともに男女で差が無いという結果を示している。これらの研究から，性役割的性格特性についても変化が起こっており，かつては女性的，男性的とされていた特性がどちらのものでもなくなって来つつあるということが示唆されている。

ここまで，現代における人々の性役割観，性役割的性格特性の変化について触れてきたが，一方で，変化のない一面もある。東福寺（2003）の研究では，現代の大学生が職業について，例えば今まで女性的あるいは男性的と思われていた職業に違う性別の者が就くことに違和感があるかどうかということや，男性よりもよく仕事ができる女性社員をどう思うかということ，また男女交際や結婚についてどのような考えを持つかを問うている。その結果，仕事については男女問わずにジェンダー・フリーな価値観を持つ傾向にあり，どちらかといえば女性の方がその傾向は強いということが示された。しかし，結婚相手としては，男性はやさしくて家庭的な女性を，女性は頼りになって経済力のある男性を求める傾向があるとされた。以上から，性役割の中でも「働く」というような社会的側面は平等的になっているといえるが，恋人，配偶者として求められる性格などの個人的側面は，現代の若者であっても変わらず伝統的であると言える。

若者が理想の結婚相手等に対して未だに伝統的性役割観を持っている要因には何があるだろうか。子どもを生むのは女性であるからという生物学的な原因や，男性が育児休暇などをとりにくいというような社会構造上の原因も考えられるが，より身近な原因としてファッション雑誌の内容を挙げることができる。纓坂（2013）は現代のファッション雑誌は女性は家庭的で家事をしっかりしていれば良いという価値観を潜ませているという。また，東野（2003）の行った面接調査では，女性はファッション雑誌を読むことでもっと「女の子っぽく」ならなくてはという考えを持つようになることが指摘されている。さらに，北方・大石・木村・菊田・廉（2012）は男性向けファッション雑誌について数年分の内容を分析した結果，時代によって変遷する「男らしさ」に沿って紙面の傾向も変わっており，おしゃれを通して外見から「男らしさ」を出せることを目指している傾向が読み取れるという。これらの研究から，ファッション雑誌はファッションを通してその時代に合った男性らしさ，女性らしさを表し，理想とする生活を送ることをメッセージとして発信していると考えられる。また，ファッション雑誌において，例えば「家庭的な女性に見えるスタイル」のようにファッションと性役割が結びついたような表現がなされていることから，性役割とファッションへの関心との間に関連があると思われる。

性役割については，現在の若者でも結婚などの個人的側面では，まだまだ伝統的であるが，ファッションについても過去と現在とで変わらない面はある。それは服装に対して性別性（男らしさ，女らしさ）を求めることである。和田（1980）は幅広い世代の女性が「フェミニン（女性らしい）」な服装を好む傾向があることを示している。また，大石（2010）は現代の女子大学生が自身の印象を表現するにあたって，服装というものをどのように扱っているかということについて研究している。その中では最も自分らしいと思うファッションの系統がどのようなジャンルかということも問うており，結果としてはジャンルにとらわれずに流行の最先端を知った上で自分の似合う服装を選ぼうとするインポートセレクト系と呼ばれる系統が最も選ばれていたが，次に女性らしさを強調するガールズカジュアル系，コンサバ・フェミニン系が選ばれていた。

以上のことをまとめると，時代の流れに沿って性役割のあり方に変化が起こっているが，結婚相手に求める性格や条件のような個人的側面における人々の考え方は相変わらず伝統的であり，ファッションについてもまた，時代によって好まれるデザイン等に違いはあるが，性別性を強調する服装が一定数の人に好まれるのは時代を通して一貫しているということである。そして，各時代におけるファッション雑誌はそのような服装をすることが女性・男性にとってふさわしいと強調するような情報を発信し，読者に影響を与えていると言える。このことから，性役割観・性役割的性格特性とファッションへの意識の間につながりを見出すことができ，ファッションは自身の性役割観・性役割的性格特性を色濃く反映するものであると言えるのではないかと考えた。そこで，性役割観・性役割的性格特性と，ファッションに対してどの程度の強い興味，関心を持っているかという「ファッション意識」に関連性があるのかということを本研究において検証することにした。

ファッションとジェンダーについて調査した研究はきわめて少ないが，坂本（2011）による研究において，男女共にファッション意識と「女は女らしく，男は男らしくする方がよい」などの性役割規範意識の間に正の相関が見られたことから，ジェンダーに関する意識とファッションに関する意識の間に関連があることが分かった。

しかし，坂本の研究は対象が20歳から49歳と年齢幅が広く，年齢差は一切考慮されていなかった。20代であれば，普段着は自分の好きなものを自由に選べることが多く，ファッションについての関心も高いと考えられるが，40代であれば，例えば子どもを持つ親としてふさわしい服装など，社会的な目線を意識して服装を選ぶことが多く，自分でファッションに興味を持ってそれを取り入れようとすることが若者と比較して少ないと考えられる。

本研究では，そういった年齢，育った時代による差を取り除くため，対象者をファッションに最も興味を持つ世代である大学生に絞り，性役割観や性役割的性格特性とファッション意識およびファッション情報の入手方法との関連を検討することとする。これまで述べてきたことを踏まえて，ファッション雑誌をファッション情報の入手方法とし、ファッションに対して積極的な意識を持つ者は伝統的性役割観や伝統的な性役割的性格特性が高い傾向があると考える。

方　　法

調査日時，場所および状況

2015年10月から11月にかけて調査を実施した。大学の講義室内において，授業（1クラス）の一部の時間を使い，調査票を配布し回答を求めた。また，それ以外にも個人的に質問紙を配布し，その場で回答してもらった。

調査対象者

兵庫県内のある大学の学生251名（男性60名，女性191名）が質問紙に回答した。そのうち，授業内での回答者が160名，個人的に質問紙を渡した回答者が91名であり，全員が同じ大学の学生であった。対象者の年齢の範囲は18歳から26歳で，平均は20.03歳（SD＝1.18）であった。

質問紙

大学生のファッション意識に関する調査と題した計6頁の質問紙を作成した。

最初に，ファッションに関する基礎情報を問う質問項目を設けた。質問項目の1つ目は「あなたは“ファッション”が好きですか」という問いで，「はい」か「いいえ」のどちらかに丸をつける回答方法とした。質問項目の2つ目（以下，ファッション情報入手方法）は「あなたはどのような媒体を使ってファッションの情報を入手していますか？」という質問で，「ファッション専門の雑誌（以下，ファッション雑誌）」「ファッション専門以外の雑誌」「テレビ」「インターネット（ホームページ，ブログ，SNS等）」「服売り場の店頭」「その他」の6つの選択肢から1つを選んでもらった。

伝統的性役割観の高低を測る尺度として，鈴木（1987）による平等主義的性役割態度スケールを使用した。「家事や育児をしなければならないから，女性はあまり責任の重い，競争の激しい仕事をしないほうがよい」「女性の居るべき場所は家庭であり，男性の居るべき場所は職場である。」や逆転項目として「女性も，仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきだ。」「家事は男女の共同作業となるべきである。」など計40問から成り，自分の考えはどのくらいあてはまるかを「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5件法で回答するものである。本来は得点が高いほど平等的な性役割観を表わすように作成されているが，本研究においては得点が高いほど伝統的な性役割観を持つことを表わすように得点の処理を行った。なお，本研究における伝統的性役割観スケール全体のα係数は0.79であった。

性役割的性格特性を測る尺度として，杉原・桂田（2000）による性役割特性尺度を使用した。この尺度は日常的に意識できる性役割に関連した性格を表す30の形容詞・名詞から成り，それらの性格が自分にどのくらい当てはまるかを「1. 少しもあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7件法で回答するものである。なお，項目はそれぞれ10個ずつ男性性，女性性，中性性に分かれている。男性性を表す性格特性である「リーダーシップを取る能力がある」「意志が強い」「行動力がある」「視野の広い」「皆をまとめることができる」「根性がある」「自立した」「説得力がある」「人から頼りにされる」「正々堂々とした」の10項目の回答の合計点が男性性得点となっている。同様に女性性を表す性格特性である「純粋」「しとやか」「愛情ぶかい」「かわいい」「良く気がつく」「ていねい」「おだやか」「子供好き」「世話好き」「きれい好き」の10項目の回答の合計点が女性性得点となっている。各得点は高いほど男性性，または女性性が高いことを示す。なお，本研究における男性性項目のα係数は0.87，女性性項目のα係数は0.78であった。

最後は，ファッション意識の高低を測る内容で，坂本（2011）によるファッション意識尺度を使用した。「洋服を選ぶときは，恋人がその服を気に入りそうか考える。」「新しいファッションが市場に出る時，私はそれらをまっさきに採用しようとする。」「私は洋服タンスに最新のスタイルの服をそろえるように心がけている。」といった自分のファッションについての行動を測る項目計13問から成り，自分はどのくらいその通りだと思うかを「1. そう思わない」から「4. そう思う」までの4件法で回答するものである。これらの13項目の回答の合計点をファッション意識得点とした。なお，本研究にお

けるファッション意識尺度の α 係数は 0.87 であった。

結　　果

本研究ではファッションに関する基本情報としていくつかの項目について聞いたが，ファッション雑誌が伝統的な性役割観を促進しているという先行研究の知見に基づき，分析においてはファッション情報入手方法のみを取り扱った。ファッション情報入手方法については，ファッション雑誌を選択した者とそれ以外を選択した者に分けて，他の変数との関連を見た。なお，ファッション情報入手方法のうちファッション雑誌を選択した者は 66 名（男性：10 名；17%，女性：56 名；29%），それ以外を選択した者が 183 名であった。

ファッション情報入手方法とファッション意識得点の関連

ファッション情報入手方法とファッション意識得点の高さの関連を検討するために，男女別に t 検定をおこなった。分析の結果，女性のみに有意差が見られ（t（189）= 2.54，p < .05），ファッション雑誌を選んだ者の方がファッション意識も高いという結果であった。ファッション雑誌を選んだ女性のファッション意識得点の平均は 31.16 点（SD = 6.57），それ以外を選んだ女性のファッション意識得点の平均は 28.55 点（SD = 6.43）であった。

伝統的性役割観について

まず，性役割観尺度全 40 項目を用いて因子分析（因子抽出は最尤法，因子回転はプロマックス法による斜交回転）を行った。作成者の鈴木（1987）によれば，この尺度は 1 因子構成であるが，先述のとおり，性役割観には社会的側面と個人的側面の 2 側面があると考えられ，この尺度の項目についてもその 2 種類に分けることができそうな内容となっていると思われた。そのため，分けて検討した方がより詳細な結果が得られると考え，本研究においては，因子分析を行った。スクリープロットに従って 2 因子解を採用した。その結果を Table 1（因子分析表）と Table 2（因子間相関）に示す。それぞれの因子に高い因子負荷量（0.3 以上）を持つ項目の内容を解釈し，第 1 因子は社会において男女が平等に生きていくことに関する問い（19 項目）で構成されているので「社会的側面因子」，第 2 因子はプライベート，とりわけ結婚後の生活における男性，女性の役割に関する問い（15 項目）で構成されているため「個人的側面因子」と名付けた。

次に，個人的側面得点がファッション情報入手方法によって異なるかを検討するために，男女別に t 検定をおこなったところ，女性においてのみ有意な差が見られた（t（189）= 2.38，p < .05）。ファッション雑誌を選択した女性の個人的側面得点の平均は 40.30 点（SD = 9.69），それ以外を選択した女性の個人的側面得点の平均は 36.88 点（SD = 8.77）であった（Fig. 1 参照）。社会的側面得点についても同様に，男女別に t 検定をおこなったが，男女ともに有意な差が見られなかった。

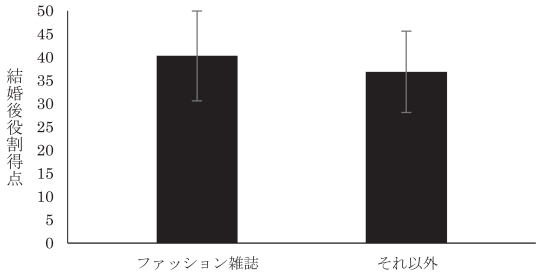

Fig. 1　女性の「ファッション情報入手方法」の選択項目による個人的側面得点の平均値の比較

さらに，社会的側面得点とファッション意識得点の関連を検討するために，社会的側面得点の中央値を基準として回答者それぞれを社会的側面得点高群と低群に分類し，男女別に t 検定をおこなったが，男女ともに有意差はなかった。また，個人的側面得点についても同様に男女別に t 検定をおこなったところ，女性においてのみ有意な差が見られた（t（189）= −4.07，p < .005）。女性の個人的側面高群のファッション意識得点の平均は 31.05 点（SD = 6.69），低群の平均は 27.33 点（SD = 5.84）であった（Fig. 2 参照）。

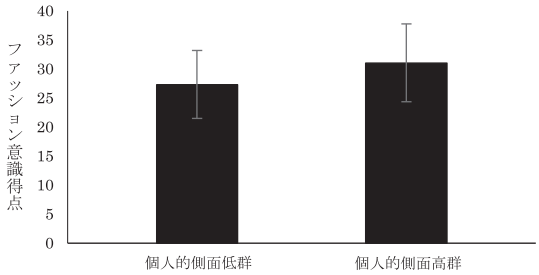

Fig. 2　女性の個人的側面得点の高低によるファッション意識得点の平均値の比較

Table 1　平等主義的性役割態度スケールの因子分析結果

	因子 1	因子 2	共通性
女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である。	0.387	−0.266	0.284
従来男性の仕事と考えられてきた職業(エンジニア、タクシーやバスの運転手、パイロット、シェフ、外交官、数学者など)に今後は女性もどんどん進出すべきである。	0.519	−0.055	0.29
女性はこどもが生まれても、仕事を続けたほうがよい。	0.308	−0.211	0.18
自立した人間になるためには、未婚・既婚を問わず、女性も仕事をしたほうがよい。	0.323	−0.162	0.163
夫婦が共働きの場合、家事を平等に分担すべきである。	0.606	0.043	0.353
夫婦が共働きの場合、育児を平等に分担すべきである。	0.527	0.15	0.251
常に家庭に居て子育てに専念する母親だけが理想の母親であるとは限らない。	0.399	0.012	0.156
こどもには、男女の区別なく教育の機会を平等に与えるべきだ。	0.498	−0.088	0.283
男女の関係は対等であるべきだ。	0.647	0.08	0.393
中学、高校では男子も家庭科を学ぶべきである。	0.522	−0.086	0.307
家事は男女の共同作業となるべきである。	0.623	−0.05	0.41
男女の能力差より、個人の能力差のほうが大きい。	0.344	−0.199	0.2
女性も訓練を受ければ、責任のある仕事や重要事項の決定をまかせられる。	0.581	−0.095	0.381
女性であるという理由だけで仕事上のチャンスを奪ってはいけない。	0.636	0.029	0.394
将来は、女性が男性と完全に平等の仕事内容、賃金、昇進を得られるようになることが望ましい。	0.756	0.008	0.568
女性が社会に出て働けば、社会の進歩や発展にとってもプラスになることが多い。	0.713	0.117	0.471
男性と平等になるために、女性が自立の意識を以て地位向上をめざすべきである。	0.697	0.185	0.441
家庭や社会で、男女平等の原理と義務をもっと強調すべきだ。	0.733	0.097	0.503
女性も、仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきだ。	0.716	0.112	0.476
プロポーズはやはり男性からした方がよい。	0.082	0.435	0.174
女性が、社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのがむずかしくなるから、そういう職業をもたないほうがよい。	−0.14	0.522	0.337
女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい。	0.01	0.662	0.434
女性は結婚してこどもが生まれたら仕事をやめ、末子が小学校に入学するころに再就職するのが望ましい。	0.069	0.43	0.172
経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい。	0.093	0.341	0.105
家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい。	−0.12	0.537	0.343
結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。	−0.253	0.413	0.299
主婦が働くと夫をないがしろにしがちで、夫婦間系にひびがはいりやすい。	−0.161	0.457	0.28
専業主婦として、趣味、スポーツ、レジャーなどを楽しむ生活のほうが、共働きをする生活より幸せである。	0.082	0.567	0.299
女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である。	−0.107	0.703	0.551
主婦が仕事を持つと、家庭の負担が重くなるのでよくない。	0.091	0.629	0.368
結婚したら、こどもを生んで育てるのが当然である。	0.063	0.53	0.265
子育ては女性にとって一番大切なキャリアである。	0.194	0.69	0.431
男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。	0.043	0.596	0.341
娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。	−0.124	0.45	0.252

Table 2　因子間相関

因子	1	2
1	1	−0.308
2	−0.308	1

性役割的性格特性について

男性性・女性性得点がファッション情報入手方法によって異なるかを検討するために，それぞれ男女別に t 検定をおこなった。分析の結果，男性においてはいずれも有意な差が見られず，女性においては女性性のみに有意な差が見られた（t（188）＝2.33，p＜.05）。ファッション雑誌を選んだ女性の女性性得点の平均は 36.73 点（SD＝8.64），それ以外を選んだ女性の平均は 33.55 点（SD＝8.55）であった（Fig. 3 参照）。

次に，男性性得点とファッション意識得点の関連を検討するために，男性性得点の中央値を基準として回答者それぞれを男性性得点高群と低群に分類し，男女別に t 検定をおこなった。分析の結果，男女ともに有意な差が

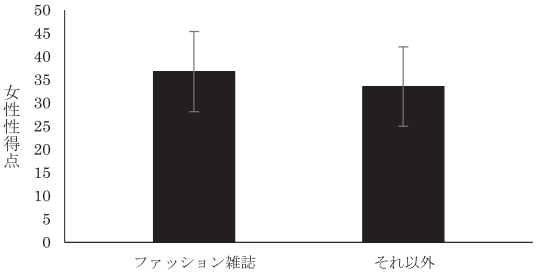

Fig. 3　女性の「ファッション情報入手方法」の選択項目による女性性得点の平均値の比較

見られた（男性：t（58）＝−2.03, p＜.05，女性：t（189）＝−3.94, p＜.005）。男性の男性性高群のファッション意識得点の平均は 28.77 点（SD＝8.72），低群は 24.24 点（SD＝8.55）であり（Fig. 4 参照），また女性の男性性高群のファッション意識得点の平均は 30.96 点（SD＝6.18），低群は 27.34 点（SD＝6.49）であった（Fig. 5 参照）。

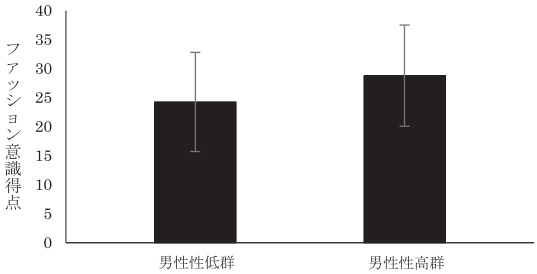

Fig. 4 男性の男性性高低群によるファッション意識得点の平均値の比較

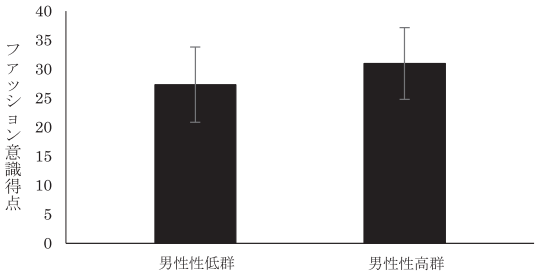

Fig. 5 女性の男性性高低群によるファッション意識得点の平均値の比較

同様に，女性性得点の中央値を基準として回答者それぞれを女性性得点高群と低群に分類し，男女別に t 検定をおこなった。分析の結果，女性のみ有意な差が見られた（t（188）＝−4.66, p＜.005）。女性性高群の女性のファッション意識得点の平均は 31.33 点（SD＝6.10），低群の平均は 27.11 点（SD＝6.36）であった（Fig. 6 参照）。

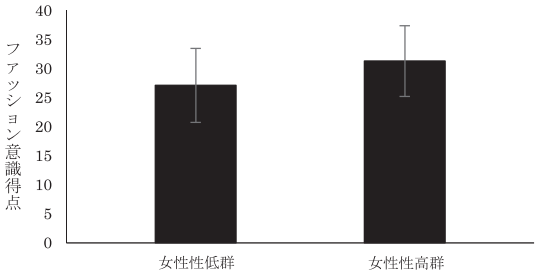

Fig. 6 女性の女性性高低群によるファッション意識得点の平均値の比較

考　　察

本研究の目的は大学生の性役割観や性役割的性格特性とファッション意識との関連を検証することであった。また，ファッション雑誌がファッションを紹介すると共にその時代に合った男らしさ，女らしさを表現することを促進しているという見解もあるため，性役割観や性役割的性格特性とファッション雑誌をファッションの情報入手方法として選んでいること，およびファッション意識に関連があるのではないかという仮説のもと研究を行った。

性役割観とファション情報入手方法としてファッション雑誌を選んでいるかどうかの関連では，女性においてのみ，ファッション雑誌を選んだ場合に性役割観の個人的側面得点が高いことが分かった。個人的側面とはプライベート，とりわけ結婚後の生活における男性，女性の役割に関する内容であり，ファッション雑誌が重視するとされる家庭的であることに合致するからだと考えられる。一方で，近年ではキャリアを積むことを促進するような内容が書かれた女性向けファッション雑誌も登場しているが，社会的側面得点との関連がないことから，ファッション情報入手方法としてファッション雑誌を選ぶこととキャリア的な思考は関係がないと言える。男性で女性と同じような結果が見られなかったのは，そもそも男性のファッション雑誌と女性のファッション雑誌では性役割を促進している程度が違うのかもしれない。また，男性とファッション雑誌の関係性が女性とファッション雑誌の関係性と違っていることも考えられる。ファッション情報入手方法としてファッション雑誌を選択した男性が女性と比べて少ないため，男性にとってのファッション雑誌が女性ほど身近な存在ではないことが考えられる。男性にはファッション情報入手方法とファッション意識の関連が無かったことから，男性と女性ではファッション雑誌が与える影響が違っていることが分かる。以上のことから，男性向けファッション雑誌が伝統的性役割を促進しているとしても，読者となる男性は女性ほどファッション雑誌を深く気に留めて読んでおらず，内容による影響をそれほど受けることにならないため，ファッション雑誌を選んだ男性の個人的側面に影響を与えるほどではなかったことが考えられる。

性役割観とファッション意識の関連では，女性に限り，個人的側面においてのみ関連がみられ，プライベート，とりわけ結婚後の生活における男性，女性の役割について伝統的な考え方を持っている者ほどファッション意識が高いことが示された。個人的側面因子は，専業主婦などの伝統的な女性の生き方を実現しようとする考えを反映しているため，女性として魅力的な人になるための一つの手段であるファッションに対する興味関心を表

すファッション意識との関連が出たことが考えられる。先述したように伝統的な性役割観のうち，個人的側面は今でもあまり変化がなく，同様にファッションにおいても女性の場合は女性らしさを求めるという点は変わっていないため，この関連は伝統的な考えに基づくものであり，仮説通りであると言える。よって，性役割観とファッション意識の関連については，女性は概ね予測通りであった。

性役割的性格特性とファッション情報入手方法としてファッション雑誌を選んでいるかどうかの関連では，ファッション情報入手方法としてファッション雑誌を選んだ女性の女性性得点が高いことが分かった。一方，男性では関連は見られなかった。つまり，ファッション雑誌が時代に合った男性らしさ，女性らしさを促進しているとする見解が女性には当てはまっており，性格特性に反映されていると言えるが，男性には当てはまらないということになる。男性については，性役割観と同様にファッション雑誌による影響があまりないことが考えられる。

性役割的性格特性とファッション意識の関連については，男性の男性性得点，女性の女性性得点が高いとファッション意識得点が高いということが示され，仮説を支持した。時代によって流行のスタイルが変わるなどして実際の服装は変化しているが，少なくとも現代では男性は男性らしさ，女性は女性らしさを表現する手段としてファッションを用いようとしていることを示唆していると言える。項目を細かく見ると，女性性を表す性格特性に含まれる，「しとやか」「かわいい」「きれい好き」といったことはどのようなファッションをしてみたいかを考える上で直接的に基準となりうるものであり，女性の場合，ファッション雑誌などを参考にしながら「かわいい」や「しとやか」なファッションを探す傾向があると考えることができる。これらの項目は和田（1980）や大石（2010）によって多くの女性に愛されているとされたフェミニンと呼ばれるジャンルとつながりのあるものであるため，実際にフェミニンな服装が好きかどうかということを問うてはいないものの，女性性が高く，ファッション意識が強い女性はフェミニンな服装を好む可能性が高いことが示唆される。一方，男性の場合，男性性を表す性格特性は，「リーダーシップをとる能力がある」「説得力がある」のような社会的な場面で必要とされる能力，およびそこから派生する自信と関連する項目で構成されており，女性性と違ってファッションと直接的な関わりを見出せる内容ではないと言える。しかし山内（2004）の研究などにおいて，自信を強く持つ人ほど自分をよりよくしようとする思いが強くなるとされているため，自身をリーダーシップがある人間と捉えるなど，自信を強く持つ男性はファッションのことを自己実現のためのアイテムとして捉え，強い関心を持つようになるのではないかと推測できる。また，男性性については，男性だけでなく，女性の場合でもファッション意識得点との間に関連が見られた。現代ではほとんどの女子大学生が卒業後就職し，社会的な場面で必要とされる能力が必要となるため，女性の場合にも男性と同じことが言えるのではないかと思われる。

以上のことから，性役割観，性役割的性格特性とファッション意識の関連は，女性については概ね認められたが，男性については，性役割的性格特性のうちの男性性とファッション意識の関連が見られたものの，それ以外の関連は認められなかった。男性はそもそもファッションへの興味・関心が女性と比べて低いので，ファッション意識が個人の価値観などとは結びつかないのだと考えられる。しかし，本研究の男性参加者は一大学の数少ない男子学生であるので，この結果を一般化することは難しい。最近は，若い男性のファッションへの興味・関心も高まって来ているとされているので，より多くの男子学生，特に服飾関係の専門学校に通う学生なども含めて調査してみると，違った結果が得られるかもしれない。

引用文献

東野充成（2003）．ファッション誌の受容と青少年のアイデンティティ構成．飛梅論集九州大学大学院教育学コース院生論文集，3, 31-49

北方晴子・大石さおり・木村拓也・菊田琢也・廉惠晶（2013）．現代における「男らしさ」の構築と男性ファッション誌の役割：1980 年代以降，メンズノンノ誌を中心に．服飾文化共同研究最終報告，78-85

児玉真樹子・杉本明子・松田文子（2003）．現代の男女大学生の性格特性と性役割認知．広島大学心理学研究，2, 73-84

大石さおり（2010）．女子大学生が意図する服装による印象管理効果．日本感性工学会論文誌　9，503-510

纓坂英子（2013）．女性誌にみる伝統的性役割．駿河台大学論叢，47, 229-240

坂本佳鶴恵（2011）．女性・男性雑誌とジェンダー規範，ファッション意識――首都圏男女への質問紙調査の分析．お茶の水女子大学人文科学研究，7, 139-152

Sugihara, Y & Katsurada, E（2000）. Gender-Role Personality Traits in Japanese Culture, Psychology of Women Quarterly, 24, 309-318.

鈴木淳子（1987）．フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討．社会心理学研究，2，45-54

鈴木淳子（1991）．平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成．心理学研究，65，34-41
東福寺一郎（2003）．大学生のジェンダー・フリー観：学生意識調査をもとに．地研年報（三重短期大学地域問題総合調査研究室），8, 101-110.
土屋みさと・堀内かおる（2008）．高校生のジェンダー観と着装行動意識との関連性．日本家庭科教育学会誌，51，105-112
山内京子・戸梶亜紀彦（2004）．看護職のキャリア形成と自己概念に関する研究．看護学統合研究　5，6-17
安永明智・野口京子（2012）．ファッションへの関心と着装行動に関する基礎的調査研究：性別，年齢，主観的経済状況，性格による差の検討．ファッションビジネス学会論文誌　17, 129-137
湯浅陽子（2001）．データに見る性別役割分業意識の変化と「家族」．英文学　30, 42-58
湯川陸子（1983）．性役割．三宅和夫他（編），波多野・依田児童心理学ハンドブック．金子書房，251-263
湯川隆子・清水裕士・廣岡秀一（2008）．大学生のジェンダー特性語認知の経年変化――テキスト・マイニングによる連想反応の探索的分析から．奈良大学紀要，131-150
和田直久（1980）．オフィスレディのファッション意識と行動の最近の傾向について．繊維製品消費科学，21, 278-283